地域研究成立史の一断面
——泉靖一と済州島——

小　川　伸　彦

はじめに

「古典的民族誌の盛んであった時代を『民族誌の時代』と呼び、地域研究の成立してくる一九四〇年代後半以降を『地域研究の時代』と呼ぶ」という立場[1]をとるならば、地域研究の成立に関する知識社会学的な研究も、主に戦後の研究史を題材に検討を進めることになるだろう。しかしながら日本では、何をもって地域研究とみなすかに関して未だ模索の状態にあり、また「民族誌の時代」との連続性・非連続性に関する検討も十分ではない。そこで本稿では、前史としての「民族誌の時代」も地域研究成立史のなかにふくめて考えることとする。「地域」を「研究」することがいかなる営みであるのかを、その成立の過程を検討することによって探ることが、本稿の狙いである。

本稿で注目するのは、日本統治下の朝鮮において行われた泉靖一による済州島研究である。一般に地域研究の前史は、宋主国による植民地経営とかかわっていることが多い。ただし、植民地においてなされる調査研究がすべて統治の一環であったというわけではない。この点は、どのような認識の枠組みによって調査者が調査対象を捉えていたのか、という問題へとつながっている。また探検的調査と長期滞在調査との違い、どのようなディシプリンに依拠するのかなどの諸点も無視することはできない。泉の済州島研究は、このようなさまざまな要素が交錯する地点においてなされたという意味において、地域研究成立史のなかで興味深い位置を占めているのである。

済州島との出会い—地域およびディシプリンとの遭遇—

日本の民族学・文化人類学のなかで泉靖一はどのような一般的位置づけがなされているのであろうか。やや長くなるが、スタンダードな事典の記述をみてみよう。

いずみせいいち　泉靖一　1915-70

野外調査に功績をあげた文化人類学者。東京で哲・ハツヨの間に生まれ、哲の明治大学

から京城帝大への転勤に伴い朝鮮に渡り、京城大予科、同大法文学部で学んだ。初めは国文学、のちに社会学、宗教学を秋葉隆、赤松智城のもとで学んだ。山登りに熱中し探検を好み、学生時代から済州島、オロチョン族、ゴルジ族などを調査した。卒業後、助手に任官したが間もなく兵役につき、3年後、除隊し京城にもどった。この間、井関貴美子と結婚。1943年にニューギニアの資源調査団に参加、45年に蒙古や北支の調査を行う。敗戦とともに罹災民救済に奔走し、博多に在外同胞援護会を設立するために尽力した。1948年明治大学に就職し、51年には東京大学東洋文化研究所に移り、以後、石田英一郎らとともに、同研究所および教養学部で、文化人類学の研究と教育にあたった。70年に同研究所長に在職のまま病にたおれた。国内・国外でほとんど毎年、人類学的な調査を行った。奈良県十津川村、同北山川調査（1949年）、八学会による対馬共同調査（1950年、幹事長）、沙流川アイヌ調査（1951年）のあと、敗戦後の日本人の社会的緊張の研究の一環として、日本人の人種偏見、立川の街娼などを調べ（1951年）、さらにブラジル日系移民の勝ち組み・負け組みの調査（1952年）をしているうちに、ラテンアメリカへの興味をそそられるようになる。1958年にアメリカ大陸への日本最初の大規模な調査団として、東京大学アンデス地帯学術調査団（石田英一郎団長）が派遣されたが、その時の中心的メンバーであった。第２次調査団以降は1969年まで4回にわたって団長を勤め、1960、63、66年におけるペルー国中央山地のコトシュ遺跡の調査で、無土器時代神殿群という、当時は想像もされなかった特異な構造を発見し、国際的に高い評価を受けた。日本でも北海道のシタコロベ、オンコロマナイなどの発掘を試みた。晩年は日本の文化伝統とその周辺に関心を深め、再度の済州島調査（1965年）、屋久島調査やアイヌ絵研究（1967年）、奄美のシャーマニズム調査（1970年）などを精力的に行った。精緻な理論構築よりも実践的な問題提起にすぐれ、著書やマスコミを通じて文化人類学の普及に足跡を残した。なお、国立民族学博物館、人間博物館リトルワールドの設立にも大きな役割を果たした[2]。

詳細でバランスのとれた紹介といえるだろう。しかし、これだけを見ると、その生涯のなかで済州島が占めた意味を推し量ることは困難である。以下、この点を補ってみてゆこう[3]。

日本のフィールド・ワーカーの多くがそうあるように泉の場合も、登山への関心がその学的生涯の基底を流れている。京城帝国大学へ転任することになった国際法学者の父・泉

哲を追って京城府（現在のソウル）へ移りすんだのが1927年、靖一は12才であった。自伝的著作『遥かな山やま』[4]によれば、山の体験は京城公立中学校時代に夏、家族全員で朝鮮・内金剛の山中にある長安寺のバンガロー（貸別荘）で過ごしたことに始まる。その後、この金剛山中の最高峰である毘盧峰や京城近郊の山々に登りつつ予科から1935年に京城帝国大学法文学部に進んだ泉は、国語・国文学科に入学した。しかしここでも生活の中心は山にあり、自ら創設した山岳部を隊長として率いて登山の技術を磨き、経験を積む日々を送る。そして同年末から翌年一月にかけて、積雪期登攀を試みた済州島の漢拏山で発生した一つの出来事が、彼の人生を変えることになるのである。それはメンバーのひとり前川隊員を山頂近くの雪中で見失うという、遭難事故であった。

七日間の捜索にもかかわらず、前川隊員は行方不明のままである。苦悩のなかで、彼は済州島のシャーマンの神託を耳にする。「前川君は死んでいない。神々が彼をかくしている」という内容であった。これを荒唐無稽なものとせず真剣にうけとめることで、彼の生涯の方向が決まってゆく。彼自身の言葉を引いてみよう。

「済州島での遭難は、私の人生を大きく変えた。朝鮮の人々のものの考え方や生活のしかたが、私によくわかってきた。それまで、北朝鮮、金剛山や京城の付近の山々を歩き、朝鮮の山村や農村の人々と話しあう機会はあった。しかし、私は彼らと生活をともにして、彼らと同じ考えかたで物事をながめようとはしなかった。ところが、この遭難をとおして、済州島の人々と生活をともにし、神房の神託を聞いた。雪のなかにたおれた前川君が生きているという神託はあたらなかったが、彼らには彼らの論理や思考の体系があって、それが私たちの論理や思考とかけはなれたものはないことがはっきりしてきた。彼らの立場にたてば、彼らを理解することは容易なのである」（『遥かな山やま』210頁）。そして彼は、「前川君が眠っている済州島の人々を、島の人々の立場から描きだしたいと真剣に考える」（同）ようになるのである。

ここには、ひとつの他者認識のスタイルが明確に宣言されている。もちろん30年以上を経て書かれた回想の文章であるから、事後的に整理された表現が用いられており、また、「彼らの立場にたてば、彼らを理解することは容易なのである」という視点には反論もありえよう。しかしながら、異文化を単なるもの珍しさとは別の視線でとらえる姿勢から、泉のフィールドとのかかわりが始まっていることには注目しておきたい[5]。

国文学科に所属していた彼は、この出来事をきっかけに宗教学・社会学研究室の赤松智城および秋葉隆による朝鮮のシャーマニズム研究の存在を知り、社会学専攻の希望を秋葉

に話す機会を持つ。秋葉は泉にマリノフスキーの『西太平洋の遠洋航海者』を手渡し、「こんなことを、一生やるのですよ。だが就職口はほとんどないでしょう。いいですか？」（前掲書、211頁）と問いかける。しかし、これを夢中になって読んだ泉は、「済州島の人々の生活をこんな角度から描きだすことができればすばらしいにちがいない」（同）と意を強くする。そして、1936年4月より秋葉のもとで研究・調査生活を開始するのである。

雪の漢拏山における遭難事故は泉に三つのものをもたらしたといえるだろう。ひとつは、異文化に属する他者を認識する視点であり、二つ目は、そのような視点を生かす場としての学問分野との出会いである。そして三つ目は、登山の対象としてではなく、研究対象地域としての済州島である。こうして彼は、済州島の民族誌を書くことを卒業論文のテーマに定める。「徹底的に野外調査のデータによることとして、そののち、機会あるごとに済州島におもむいて調査に従事」（前掲書、212頁）することになるのである。『西太平洋の遠洋航海者』が刊行されたのは1922年。「『近代的』意味での民族誌の出発点」[6]とされる本書が世にでて14年後に、一人の青年が本格的な民族誌執筆を志したのであった。

ただし泉におけるこのような人生の方向づけも、大局的にみれば、朝鮮半島における日本の植民地統治があって初めて起こりえたものであることを見逃すことはできない。各地の登山が可能になったのも、植民地統治と無縁ではない。たとえば、漢拏山の積雪期登攀の準備段階において、「済州島の営林署も協力してくれた。蟻頂を登りつめて大石沢に下ったところに山小屋をつくってくれ、それは蟻頂小屋と名付けられた」（『遥かな山やま』201頁）という。大学生の登山計画にここまで行き届いた援助がなされたのは、1910年の併合から25年が経過して植民地のすみずみにまで統治がおよんでいたことの表われであろう。そしてすでにみたように、こうして実現した済州島登山が泉を民族学に向かわせたのである。

フィールド・ワーカーになろうとする一人の青年の、純粋な他者理解への情熱と、それを可能にした植民地統治というマクロな状況との関係を、泉の卒業研究に即して次節で見てゆくことにしよう。

卒業論文「済州島―その社会人類学的研究」　―植民地におけるフィールドワーク―

泉が済州島調査を行ったのは1936年から翌年にかけての二年間である。この間彼は、「時間と金の許すかぎり済州島におもむいて、農村に泊まりこんで調査をくりかえした」

（「遥かな山々」232頁）という。「憑かれたもののように済州島の村々を歩いた」[1]ともいう。こうして完成され「済州島―その社会人類学的研究」と題された卒業論文は、渋沢敬三によって出版が約されていたにもかかわらず、実現せず、そのままの内容を知ることはできない。我々が見ることができるのは、30年後にその後の研究とともに刊行された『済州島』の第一部「済州島民族誌」である。しかし「野帳や粗資料としての統計の大部分は、敗戦による引き揚げのときに失われているので、主としてそのころの論文によらざるをえなかった」（『済州島』ii頁）とされているので、この第一部は卒業論文の原形をかなりの程度とどめているとみなしてよいであろう。やや長くなるが、その構成を紹介したい。

第一章　自然環境

　第一節　地質　第二節　地形・水系・海流　第三節　気象

　第四節　植物および動物　第五節　総合

第二章　村落の研究

　第一節　住民と歴史　第二節　部落の分布状態とその性格

　第三節　村内における姓氏　第四節　村落と職場　第五節　交通　第六節　総合

第三章　家族の研究

　第一節　世帯の人口と家族の成員　第二節　家族の食物　第三節　農業と家族

　第四節　牧畜と家族　第五節　漁撈と家族　第六節　島の女性　第七節　総合

第四章　超家族集団の研究

　第一節　親族関係　第二節　ゆいおよび契　第三節　碾磨集団

　第四節　水を中心とする生活　第五節　総合

第五章　済州島の宗教

　第一節　島の聖所　第二節　牛島Tone村の行事　第三節　総合

第六章　済州島民具の解説

　第一節　衣類　第二節　食器類およびその他の生活用具　第三節　農具類

　第四節　漁具　第五節　家屋

付　済州島方言集

目次の構成だけをみても、この論文が済州島社会の全体像を包括的に描きだそうとした

本格的な民族誌であることが読みとれる。「第二章　村落の研究」では、自然村と行政村の対応関係、生業と標高に応じて島民自身が行っている村の階層分類をもとにした村落分類の設定、島庁統計および古老からの聞き取りをもとにした島内の人口移動の分析などが興味深い。「第三章　家族の研究」では、単に世帯人口の粗密の分布状況や家族構成だけでなく、島の労働の形態が視野に入れられ、挽臼歌・馬追い歌・櫓歌や漁業に関する禁忌までもが丹念に採集されている。また、「島の女性」という節をたて第二章での村落分類を生かしながら女性の活動分野や地位を描き出すとともに、妾のあり方に関しても偏見のない分析を加えている。さらに第四章においては、さまざまな形成契機に基づく集団への注目によって、重層的に構成されている社会関係のリアルな描写に成功しているといえよう。また、全編にわたって添えられた記録写真は今日から見ると実に貴重な資料である。まさに足かけ二年間にわたって「憑かれたもののように」島内をくまなく歩き回った成果がここにあると感じさせる力作である。

ただし、本稿のねらいは民族誌の内容そのもの検討にあるのではなく、フィールドワークの実施および民族誌の執筆に影響を与えた植民地統治下ならではの条件や状況、調査者の視線のありどころを描き出すことにある。しかし残念ながらこの論文では、泉のおこなった調査の方法やインフォーマントとの出会いの様子などついての記述が乏しく、調査実施にあたり行政当局によってどれほどの便宜供与や指示があったかはわからないが、京城帝国大学の学生の研究であるということで、なんらかの有形無形の支援があった可能性は否定できない。たとえそうであったとしても、民族誌の内容自体にはとくに影響はみられない。むしろたとえば、官設の契である里ごとの愛林契については「成績のよいものには島庁から奨励金をあたえるような天下り式の方式がとられていたのは、そのころの典型的な官庁のやり方であった」（157-8頁）とのべたり、1930年代に次々と築かれた港については「済州島民の生活上見過ごすべからざる事実は、これらの諸港が、土地の住民に直接利用されることはすくなく、日本の大資本における漁業者にのみおおく利用されていたことである」（63頁）と指摘することによって、済州島の生活者の立場から植民地統治のあり方を暗に批判するような姿勢がみられる。さらにしかしながら、民族誌の内容が島庁の存在にまったく依存することなく成立しているわけではないことにも目を向けておかなければならない。それはおもに統計の利用に表われている。分析の基礎となる各種の人口統計などはほとんどが島庁統計から引用され、詳細な里ごとの同姓家族比率図も地理学者の桝田一二が島庁の依頼によってすでに作成していたものである。研究者として、存在する統

計資料を利用するのは当然のことではあるが、統計という植民地統治の手段に依存することによって、民族誌の質が高められているという事実は否定できない。

ところで、そもそも民族学を志して二年足らずで泉がこのような完成度の高い調査を行うことができたのはなぜであろうか。もちろん数年来の登山のたびごとに村落の人々と盛んに接触してきていたことや、彼のフィールド・ワーカーとしての天分によるものもあるだろう。しかしこれに加えて彼は、転学科の三か月後である1936年7月に大興安嶺東南部でオロチョン族の調査を行っており、この経験が大いに活かされていると思われる。単身でひと月近くおこなった野外調査の結果報告は、指導教官の秋葉隆によって添削され、翌1937年の『民族学研究　第三巻一号』に「大興安嶺東南部オロチョン族踏査報告」と題して掲載された。さきほど検討した『済州島』と異なり、これには<序言>および<対象と方法>という章が割かれている。調査地域は当時の満州国内にあり、満州国警備関係者である日本人軍人の援護や助言のもとに調査が実施されたさまが描かれている。たとえば、次のような具合である。「調査に際して、彼等（オロチョン―引用者注記）に親しむことは大切であるが、そこまで行けなくても、彼等に或る程度まで接近しなくてはならぬ。特に参考品の採集を目的とする時には殊更さうである。即ちそのためには彼等の生活に同化すると同時に、若干の物質的な御土産も必要である。併し長い旅故重量が重く嵩張るものはいけない。小さくて軽く、而も彼等の最も要望するものでなければならぬ。それには阿片が最もよい。私は曽根崎参謀長の御好意により、約十二両（百二十匁）の阿片を携行して、七両程を消費した。無茶苦茶に之を振り撒く事は後々の事を考えると、悪結果を招来する怖れがあるけれども、苦しい労働や長い質問の後に阿片を与えると、にっこり子供のやうに笑ふ彼等の髭面は今以て忘れられない」（44-5頁）[8]。ここにはインフォーマントとの接触や資料の収集をスムーズに運ぼうとする配慮と、その手段として阿片を用いることの妥当性との間にねじれがあって、今日の我々には違和感を与えずにはおかない。「阿片服用は一人前になって出猟し得る者の当然の権利であり誇りである」（60-61頁）ことや、オロチョン族が普段から阿片を交易品として用いていたという認識が影響しているのであろうか。しかし、ここは泉の行動の是非を判断する場ではない。満州国は植民地ではないが傀儡国家と規定できる存在であり、やはりここでも泉は、大きな時代状況と無縁にはフィールド経験を積むことが不可能であったことを確認しておきたい。

結びにかえて

フィールド・ワーカーとなるまでの泉の個人史を以上にみてきたわけであるが、これは日本における地域研究の成立史を考える上でどのような意味をもつ事例といえるのであろうか。普遍性と特殊性という二つの観点から考えてみたい。

西欧における民族誌発生の歴史的背景を論ずる文脈で、加藤剛は次のようにいう。「民族誌家は、かならずしも植民地権力の手先となって研究を遂行したわけではない。しかし、いくつかの古典的民族誌を読めばすぐわかるように、フィールド・ワークの渦中にあった民族誌家は、しばしば植民地官僚機構によって助けられ、便宜をはかられたのである」[9]。これはまさに泉の置かれた状況をも言いあてた指摘であり、この点では泉の事例は西欧における民族誌の成立にも共通した普遍性をもっているといえるであろう。

ただしこの側面に限ってみれば、鳥居龍蔵などのよほど先駆的な事例を除けば、学術探検をも含めた日本の海外野外調査史においてこのような便宜供与は、決して珍しいケースではなかろう[10]。

しかしここで注意しなければならないのは、泉がこの植民地に少年時代から在住しており京城帝大という教育・研究機関に籍をおきつつ学部時代から地域調査に従事したという点である。このため、探検的にではなく繰り返しフィールドに滞在する形で泉が包括的な調査をおこなったのは1936-7年という時期になったわけであるが、これは同世代や少し上の世代の民族学者のなかでもかなり早いものである[11]。父親の転任を契機に植民地において精神形成期を過ごすこととなり、冬の済州島における仲間の遭難事故をきっかけに民族学を志し、マリノフスキーに師事した経験をもつ指導教授秋葉と巡り会ったという泉のケースは、偶然の要因が作用した特殊な事例のようにもみえる。しかし、1910年から植民地統治が開始され、台北よりも数年早く1924年には京城帝大[12]が設置されて、多くの日本人家族が京城などの都市部に移り住むようになっていた状況を考えれば、このようなフィールド・ワーカーが誕生することは一種の必然であるともいえる。

それは、単に未知なるものへの好奇心に動かされた探検者ではなく、異文化に暮らす人々を理解する視点と共感を備えたフィールド・ワーカーの誕生であった。ただし本稿でみてきたように、ここには無邪気にその誕生を祝すことのできない外的条件がからんでいる。「植民地権力の手先」としてではもちろんなく、かといって自己目的化した研究の進展のためでもなく、「彼らと同じ考えかたで物事をながめよう」とする視点にたつ泉の異文化地域研究が実現しえたのは、皮肉なことに植民地統治が長期化しある意味で成熟化してき

たことによっているからである。

その地で青年期を過ごすことによって、泉のフィールドへの共感は強い愛着となって生涯保持された。最晩年のある対談では、「ぼくは本当に、もう少しひまになったら、済州島でのうのうと自分の老後を送ってもいいぐらいに思っているのです」（「済州島—ふるさと」『世界』293号、1970年。『著作集　第1巻』所収）と語っているほどである。現地調査が不可能な1950年には、東京の済州島出身者への調査を実施し、1965年には短期間であるが済州島を再訪し三〇年間の変化に目を向けている。著書『済州島』は、卒業論文にこの二つの調査をあわせて1966年に刊行され、その後の研究者が常に立ち返る出発点となった。ここでは、単に「済州島という地域」の研究が受け継がれ深化していったというよりも、在日本の済州島出身者コミュニティをもふくむ形で拡張された「済州島」が、学的認識の対象地域として存在し始める端緒に泉の研究が位置している点が興味深い。

「地域」を研究しているかにみえて、実は、研究が「地域」を作り出してゆく側面を見逃してはならないと言い換えることもできよう。この意味でも、その地で最初になされた本格的な研究がどのようなものであったかをふり返って跡づけることが重要となるのである。日本が直接・間接に統治していた各地において、どのような種類の研究がどのような主体によって実施され、それが戦後の地域研究の進展にどのような影響を及ぼしているのか。今後ぜひ明らかにされるべき問題といえるだろう。

注

1：加藤剛「民族誌と地域研究」128頁『講座　現代の地域研究　第一巻　地域研究の手法』弘文堂　1993年

2：『文化人類学事典』弘文堂、1987年、51頁（執筆者　寺田和夫）

3：済州島は朝鮮半島の南方約80Kmに浮かぶ面積1800平方Km程度（大阪府よりやや小さい）の火山島。古くは、耽羅（たんら）と称され、独立国であった。高麗時代23代高宗（1213-59）のとき済州と改称され、それが現在の名称となっている。三多島（風と石と女が多い）と称され、半島とは異なった習俗をもつとされる。

なお、本稿で泉の足どりをたどるために、次の二つの文献を参考にしたことを付記しておく。

藤本英夫『泉靖一伝　アンデスから済州島へ』平凡社、1994年

泉貴美子『泉靖一と共に』芙蓉書房、1972年

4：泉靖一　1967-70　「遥かな山やま」『アルプ』連載。引用は、『泉靖一著作集 第７巻』読売新聞社、1972年による。

5：泉が当時書き残したものとしては、1936年に京城帝大生のサークル誌『城大文学』に寄せた

「五番目の叔父さん—火田の物語」という未完の小説がある。（『著作集　第７巻』所収）。これは、北朝鮮の移動焼畑耕作民の生活を描いたものであり、泉が単に自然のみを求めて山を歩いていたのではなく、共感をこめて「朝鮮の山村や農村の人々と話しあう機会」をもっていたことを裏づけるものといえよう。

6：加藤、前掲書、111頁

7：泉靖一、『済州島』ii頁、東大出版会、1966年

8：これは『民族学研究　第三巻第一号』(1937年)からの引用である。この調査報告は『泉靖一著作集 第1巻』(1972年)にも収録されているが、ここに引用した部分は削除されている。

9：加藤、前掲書、124頁

10：日本野外調査史に関するまとまった研究書はまだでていないようであるが、泉と接触のあった今西錦司らの西北研究所や南方への学術探検については、『遥かな山やま』へのあとがきとして書かれた次の文献が参考になる。

梅棹忠夫 1971「泉靖一における山と探検」（『梅棹忠夫著作集 第16巻』中央公論社、1992年所収)

11：植民地の帝大にあって学生時代から調査をおこなった人物としては、台北帝大の馬淵東一がいるが、高等学校（五高）を卒業するまでは日本にいた点が泉の場合と異なる。

12：泉自身も、自分が身を置いたこの大学について考えてみる必要を感じていたのか、世界的視野にもとづくかなりまとまった論稿を残している（「旧植民地帝国大学考」『中央公論』995号、1970年7月。『泉靖一著作集　第6巻』(1971年)にも収録）。最近の本格的な研究としては、台北帝大との比較も含め次の文献が貴重である。

馬越徹『韓国近代大学の成立と展開』「第四章　日本型植民大学としての京城帝国大学」名古屋大学出版会、1995年。